

資 料

フィリピンでの異文化看護交流における 日本人看護学生の経験

Japanese Nursing Students' Experiences in Cross-Cultural Nursing Exchange in the Philippines

篠原枝里子

Eriko Shinohara

渡邊智美

Tomomi Watanabe

竹内翔子

Shoko Takeuchi

中村幸代

Sachiyo Nakamura

キーワード：異文化看護，教育，日本，フィリピン

Key Words：Cross-cultural Nursing, Education, Japan, Philippine

要旨

異文化間の看護学生同士が交流することによる，渡航する側の日本人学生の経験について報告する。2024年8月に5日間フィリピンに渡航し，うち1日間の看護学生間の交流プログラムに参加した看護学生に対し，オンライン上での匿名式アンケートを行った。異文化交流における学びや変化，課題に関する内容の記述を抽出し，コード化，サブカテゴリー化，カテゴリー化を行い，内容を質的にまとめた。また，内容の満足度や難易度について記述統計量を算出した。

参加した学生のうち11名（回収率73%）から回答が得られ，【多角的背景から捉える医療の違いや共通点での学び】，【国を超えた同志との交流で育まれる看護学の学びと深化】，【自己を見つめることによる課題の発見】の3つのカテゴリーと“地理気候的要因を踏まえた医療や健康課題の学び”，“看護教育や学生の裁量の相違の学び”，“看護師と必要な対人関係能力へいかす学び”，“多角的視点から自身の価値観を再構築”，“目指すキャリアへの能動的な取り組みの必要性”を含む12のサブカテゴリーが抽出された。プログラム内容満足度の評価について全員が「とてもよかった」と回答した。

学生達は，自国を出て対象国での異文化を経験し，国を超えて同志の仲間と直接対話したことにより得られる特徴的な学びや変化を得ていた。

Abstract

This study aimed to explore Japanese nursing students' travel experiences when interacting with other nursing students from different cultures.

An anonymous web-based questionnaire was administered to nursing students who traveled to the Philippines 5 days in August 2024 and participated in a one-day exchange program among Japanese and Philippine nursing students. Descriptions of students' experiences of learning, change, and feelings were extracted, coded, subcategorized, and categorized.

Responses were obtained from 11 participating students (73% response rate), and three categories and 12 subcategories were extracted. Categories were [Learning from the differences and similarities in medical care based

Received：October. 29, 2024

Accepted：February. 17, 2025

横浜市立大学医学部看護学科

Department of Nursing, Graduate School of Medicine, Yokohama City University

E-mail：eshino@yokohama-cu.ac.jp

on diverse backgrounds,] [Fostering deeper learning in nursing studies through interaction with peers from different countries,] and [Identifying challenges through self-reflection.] Distinctive subcategories included [Learning about medical and health issues based on geo-climatic factors,] [Learning about differences in nursing education and student discretion,] [Learning to apply interpersonal skills necessary for nursing,] [Reconstruction of one's own values from multiple perspectives,] and [The need for active engagement in one's career goals.] All respondents answered 'very good' in their assessment of their satisfaction with the content of the program.

Japanese nursing students experienced distinctive learning and change when traveling abroad to different cultures and directly interacting with like-minded peers across countries.

I. 緒言

グローバル化に伴い、世界的にも看護職にとって文化理解への意識や対応能力は不可欠なスキルである (Cowan & Norman 2006). 我が国の看護教育においても、2017年に作成された看護学教育モデル・コア・カリキュラムの中で、看護師として求められる資質・能力のひとつとして国際社会・多様な文化における看護職の役割が挙げられており (文部科学省, 2017), 国際化に対応できる質の高い看護提供のための看護国際教育は必須である. Button ら (2005) の文献レビューによると、渡航での海外プログラムに参加した看護学生は、文化の違いをよりよく理解し、専門的・個人的レベルで成長することが報告されている. また、渡航での教育は、多様な価値観、信念、実践に関する知識を促進し、視野を広げるため (Tabi & Mukherjee, 2003), 実際にその国に渡航し、交流をすることでのみ得られる経験があると考えられる.

横浜市立大学医学部看護学科では国際看護教育の演習科目である「国際看護学演習Ⅰ」において、フィリピン共和国イロイロ市におけるフィールドワーク (以下FW) を行い、1日間の現地の学生との異文化看護交流を実施している. フィリピンは東南アジアに位置する7,000以上の島からなる島国であり、熱帯のモンスーン気候に位置する新興国である (外務省, 2022). フィリピンの政治経済の中核は首都メトロ・マニラを有するルソン島であるが、イロイロ市はフィリピン中部海域にある島々の集まるビサヤ諸島のバナイ島に位置する. フィリピンは歴史的に植民地であった影響からヨーロッパと米国、アジアの生活様式と文化が混ざり合っており、仏教やイスラム教の多いアジアの中でも唯一キリスト教 (カトリック) の信者が多い国であり (外務省, 2024), 同じアジア圏の中でも宗教も含め文化背景の大きく異なる国である. 本稿では、異文化間の看護学生同士が交流することによる、渡航する側の日本人学生の経験について報告する.

II. 方法

1. 実践内容

1) 異文化間看護学生交流の目的

対象国に渡航し、異文化で看護を学ぶ看護学生との交流を行うことにより、多様な社会・文化的な背景や医療、看護を理解するとともに今後のキャリア形成に生かすことを目的としている.

2) 参加者

横浜市立大学医学部看護学科2年次生15名、およびウエストヴィサヤス大学看護学科学生15名.

3) 日程

2024年8月27日1日間

4) スケジュールおよび交流プログラム概要

交流プログラムは事前に両国の教員間でオンライン会議を経て内容を検討した. プログラムの概要を表1に示す. 両国の文化交流、大学紹介、医療保健や看護に関するプレゼンテーションおよび小グループディスカッション、交流大学内の演習室や附属病院の見学を行った. なお、プログラム中は学生間でペアとなり、見学の際も共に行動し、終日密な交流を実施した. なお、FW実施に先立ち、日本において当該地域である東南アジアとフィリピンの文化、社会、宗教、医療、健康課題等についてアクティブラーニング形式での事前学習を行った. また、交流の準備としてネイティブの英語教師より指導を受け、英語での自己紹介やディスカッションの仕方についての基礎を身につけるとともに、現地で発表するプレゼンテーション作成にあたり指導を受け、予演会も実施し十分に準備をしてから交流を実施した. 交流の様子を付録1～3に示す.



付録1 交流の様子 (折り紙)



付録2 交流の様子（プレゼンテーション）



付録3 交流の様子（ディスカッション）

表1 異文化看護交流プログラム

項目	内容
開会式	両国の国歌斉唱
	開会の祈り
学長表敬訪問	学長挨拶
導入	学生、教員紹介
	アイスブレイク：折り紙（日本）
大学紹介 （プレゼンテーション）	両校の紹介、国の紹介
医療・看護 （プレゼンテーション）	（日本）
	日本の医療保険制度、母子保健と地域保健、
	日本の看護教育
医療・看護 （ディスカッション）	（フィリピン）
	ユニバーサルヘルスケア、フィリピンの看護教育
	プレゼンテーションを通して理解したこと、学びの共有、質疑
ランチタイム・文化交流	（フィリピン）バンブーダンス、（日本）ソーラン節
大学見学	大学内教室・演習室や教育体制の説明
附属病院見学	病院職員と学生の案内
閉会式	修了書授与、写真撮影

2. アンケート方法

Microsoft Forms を使用しオンラインアンケートを実施した。学生の異文化看護交流での経験を広く把握するために、学生が「得られた学び」「得られた変化」「得られた課題」について具体的な記述を求める3項目の質問を作成し、得られた記述について、質的記述的研究における内容分析の方法を参考に検討した。学生の経験の内容について抽出したものを文節に区切りコード化し、意味が類似・共通しているコードをまとめてサブカテゴリー化し、同様にサブカテゴリーをまとめてカテゴリー化した。また、経験に関連する交流プログラム内容の満足度(5. とてもよかった, 4. よかった, 3. どちらでもない, 2. あまりよくなかった, 1. まったくよくなかった; 5件法)、難易度(5. とても容易だった, 4. 容易だった, 3. どちらでもない, 2. 少し難しかった, 1. とても難しかった; 5件法)を収集し、量的に記述統計量を算出した。

3. 倫理的配慮

アンケート実施にあたり、口頭および文書にて、回答は自由意思であること、匿名で行われること、個人情報の保

護、結果は学会や学会誌での公表に用いることについて説明した。アンケートの回答を以って同意協力と判断した。

Ⅲ. 結果

1. 学生の経験

オンラインアンケートに回答したのは11名(回答率73.3%)であり、本報告における分析対象者とした。学びや変化、感じたことなどの経験に関する記述を抽出し、コード化、サブカテゴリー化、カテゴリー化を行った。結果、【多角的背景から捉える医療の違いや共通点での学び】、【国を超えた同志との交流で育まれる看護学の学びと深化】、【自己を見つめることによる課題の発見】の3カテゴリーと、それを構成する12サブカテゴリー、35のコードが抽出された。抽出されたカテゴリーは【 】、サブカテゴリーは< > (表2)、代表的な記述は「 」で示す。

1) 【多角的背景から捉える医療の違いや共通点での学び】

《国の社会背景を含めた医療課題の学び》は、「私立病院と公立病院での医療格差を学んだ」、「保険制度の負担

表2 異文化看護学生との交流の経験

カテゴリー	サブカテゴリー
多角的背景から捉える	国の社会背景を含めた医療課題の学び
医療の違いや共通点での学び	地理気候的要因を踏まえた医療や健康課題の学び
	自国の医療を学ぶ必要性の再認識
国を超えた同志との交流で育まれる看護学の学びと深化	看護教育や学生の裁量の相違の学び
	同志の国を超えた集いによる異文化理解と看護の意識の高まり
	看護師として必要な対人関係能力へ活かす学び
自己を見つめることによる課題の発見	能動的な学びに対する自身の変化
	能動的な意見伝達能力向上の課題
	多角的視点から自身の価値観を再構築
	チャレンジ精神の課題認識
	目指すキャリアへの能動的な取り組みの必要性
	医療専門職として会話できるための英語力の向上

や医療アクセスの問題から全ての人に医療が普及される事の難しさを感じた」,「就労環境の悪さから海外で職を求める学生が多い生の声を知った」,「熱心な将来の医療従事者が国外流出してしまうことは解決すべき問題と感じた」と、医療格差や社会背景による、医療のみならず看護職の課題について学んでいた。

《地理気候的要因を踏まえた医療や健康課題の学び》は、「開発途上国の医療の課題として貧困に加えた地理的要因という視点が得られた」,「気候により調理法に砂糖や油が多く肥満や糖尿病などの健康課題につながっていると感じた」と、医療や健康課題に地理気候的要因が関連しているということを現地で見えた国の地理的特徴や実際の食事を通して感じていた。

《自国の医療を学ぶ必要性の再認識》は、「違いに意識を向けがちだったが保健医療の共通点があることに気づいた」,「相手の国について事前に学ぶ事も必要だが自国について改めて学ぶことで重要性に気づいた」と比較することで共通点にも気づき、自国を知る重要性を感じていた。

2) 【国を超えた同志との交流で育まれる看護学の学びと深化】

《看護教育や学生の裁量の相違の学び》は、「自国に比べ学生が患者に対して行う裁量が広く実践的な学びができることに驚いた」,「うらやましいと思った」,「看護指導者と看護学生同士の気になる事を言い合える関係が技術や知識の向上に繋がると感じた」と、学生がより実践的に学びが出来る教育の違いに驚きや羨ましさを感じ、臨地実習での教員の関わりから教育のあり方についても考えを巡らせていた。

《同志の国を超えた集いによる異文化理解と看護の意識の高まり》は、「インターネットで知識が得られることは表面上であり、経験が異文化理解に繋がると感じた」,「同じ看護師の夢を持ち社会の役に立ちたい学生がいることを実感し、嬉しく今後の励みになった」,「能動的にキャリアや勉強をし広い知見を持っている他国の学生の意識の違いを感じた」と、直接的に同じ志を持つ仲間と交流することでの刺激を受けていた。

《看護師として必要な対人関係能力へ活かす学び》は、「フィリピンの学生の明るさは看護師に必要な特性だと思ったので看護に生かしたい」,「表情や説明から伝えた事をくみ取ってくれたことからわかろうとする気持ちで思いは伝わる」,「ノンバーバルコミュニケーションの大切さを知った」と、看護師として必要な相手とのコミュニケーションや態度について相手国の学生の国民性や関わり方から学んでいた。

3) 【自己を見つめることによる課題の発見】

《能動的な学びに対する自身の変化》は、「フィリピンの学生の学習姿勢に感化され講義の復習をしっかり行い自分も頑張ろうと思うようになった」,「講義中にこれが

海外だったらどうなのだろうとたまに考えるようになった」と、交流による刺激を受けたからこそ前向きな変化があった。

《能動的な意見伝達能力向上の課題》は、「自信を持って自分の意見を述べる事が出来なかった」,「自分の感情と向き合い自分の考えを述べたい」,「察してほしいというスタンスは甘えており自分の意見を自分の口で伝えないと何も伝わらない」と、言葉で考えを述べる部分に課題を感じていた。

《多角的視点から自身の価値観を再構築》は、「自分の常識の前提が異なることで話し合いの前提が食い違う事を知った」,「自分達のほうが高度な学びをしていると思っていたが他国のほうが実践的な学びや知らない知識を知っていた」,「時代や医療制度の変化の中で社会のニーズや人々の価値観に寄り添って看護をしていかななくてはならないことを実感した」と、自身の固定概念や価値観を見つめ直す経験をしていた。

《チャレンジ精神の課題認識》は、「何事にもチャレンジする精神が足りないとも感じ、戸惑わずにまずは何事にも挑戦してみようと思った」と、物事に取り組む姿勢について刺激を受けていた。

《目指すキャリアへの能動的な取り組みの必要性》は、「フィリピンの学生の将来設計を聞くことで自分のキャリアを考えて行く必要があると学んだ」,「自分自身を信じ興味のある分野に進むことの後押しになった」,「海外の看護師資格や国外で働くことについて調べ現実的に考えたい」とキャリアについて具体的に考えるという部分で刺激を受けていた。

《医療専門職として会話できるための英語力の向上》は、「日常生活・大学レベルから医療レベルの英語を学んでいかなければいけないと感じた」,「日常会話では伝え方を工夫することによって、自身の伝えたいことを伝え意思疎通を図れるが、専門用語などは、知識として必要」,「ジョークを交えた会話が楽しめるレベルまで英語力を到達させたい」と、英語力向上への課題や意欲を感じていた。

2. プログラムの内容評価と難易度

プログラム内容の満足度について、全員(100%)が「5. とてもよかった」と回答した。難易度について、2名(18.2%)「4. 容易だった」、1名(9.1%)が「3. どちらでもない」、8名(72.7%)が「2. 少し難しかった」と回答した。「2. 少し難しかった」と回答した学生の理由としては、英語力に関する記述が記載されていた。

IV. 考察

1. 背景の異なる国を実際に訪れることで得られる経験

今回渡航したフィリピンは、年齢別人口構成は6割が15-64歳、3割が15歳以下(経済産業省, 2022)と超高齢

化が進む日本と大きく異なる。疾病構造では感染症の割合が減少し、心血管疾患や悪性新生物、糖尿病・腎臓疾患等の非感染症疾患の割合が増加しており（経済産業省, 2022）、医療格差が大きく（外務省, 2022）貧困率も高いという特徴を持つ。このような背景を持つ国に実際に赴き、滞在し目で見ること、食事も含め生活を実体験すること、同じ看護を学ぶ学生の言葉で医療や看護の話しを聞くことで、学生は「国の社会背景を含めた医療課題の学び」「地理気候的要因を踏まえた医療や健康課題の学び」を得ていた。また、交流の中で自身の自国の医療についての知識不足を感じ、「自国の医療を学ぶ必要性の再認識」をし、【多角的背景から捉える医療の違いや共通点での学び】を得ていた。

2. 国を超えた同志と直接的に交流することで得られる経験

【国を超えた同志との交流で育まれる看護学の学びと深化】では、国により看護教育やカリキュラムが異なることによる「看護教育や学生の裁量の相違の学び」を得ていた。フィリピンは日本よりも学生が取得する単位数、臨地実習時間が圧倒的に多い（川口, 2009）。また看護師の裁量について日本人看護師との業務比較として、フィリピンでは患者の身の回りのケアは家族が行う事が多く、看護師の診療の補助業務も注射業務が8割と高いという特徴があり（田中ら, 2009）、背景の違いから学生が臨床実習で学ぶ際の裁量等も異なっている可能性があるが、実践的な実習を「うらやましいと思った」学生もいた。また、直接的に同じ志を持つ仲間と交流することで「同志の国を超えた集いによる異文化理解と看護の意識の高まり」が挙げられていた。「能動的にキャリアや勉強をし広い知見を持っている他国の学生の意識の違いを感じた」と、勤勉な学生と直接交流をすることで学ぶことも多かったと考える。さらに、特徴的なサブカテゴリーとして「看護師として必要な対人関係能力へ活かす学び」が挙げられた。「フィリピンの学生の明るさは看護師に必要な特性だと思ったので看護に生かしたい」という国民性の違いや、第2外国語が英語であり看護教育も英語で受け言葉が流暢なフィリピン人学生とのコミュニケーションの中で「表情や説明から伝えた事をくみ取ってくれたことからわかるようにする気持ちで思いは伝わる」と、伝えたいことをうまく伝えられない自身の困難に対する相手の対応からコミュニケーションの考察が深まったと考えられる。

【自己を見つめることによる課題の発見】として、若者の主体性に関する国際間比較の調査によると、日本の若者の主体性は他の先進国と比べても低く、「自分の考えをはっきり相手に伝えることができる」、「うまくいくかわからないことにも意欲的に取り組む」、「決断力、意志力に誇りを持っている」等の項目において、調査国中最下位であることが報告されており（内閣府, 2018）、日本人学生は、積極性があまりなく、授業に対しても受け身で

あることが多い（田中, 2013）と言われている。今回の交流において、学生は「能動的な学びに対する自身の変化」を感じており、「チャレンジ精神の課題認識」「能動的な意見伝達能力向上の課題」による主体性に対する態度の変化や課題の認識をしていた。「目指すキャリアへの能動的な取り組みの必要性」について、1970年代以降フィリピンは看護師の世界的な主要輸出国となっており（Ball, 2004）、外国人教育を受けた看護師を最も多く海外に送り出している国のひとつである（Sagar, 2014）。そのため、フィリピンの看護学生はキャリアのひとつとして当たり前海外での就労を視野に入れるという高い目標を持ち学んでおり、学生の裁量として出来る実習における看護実践の幅も広いことも含め、同じ看護学生として刺激を受けたことが考えられた。渡航での教育は、多様な価値観、信念、実践に関する知識を促進し、学生の視野を広げることに繋がるということが報告されている（Tabi & Mukherjee, 2003）。学生は交流の中で自身の常識や物事の捉え方を改めて振り返り、「自分の常識の前提が異なることで話し合いの前提が食い違う事を知った」、「自分達のほうが高度な学びをしていると思っていたが他国のほうが実践的な学びや知らない知識を知っていた」、「時代や医療制度の変化の中で社会のニーズや人々の価値観に寄り添って看護をしていかななくてはならないことを実感した」と、「多角的視点から自身の価値観を再構築」する経験をしていた。海外留学をした学生は、異文化コミュニケーション能力において、学内にとどまる学生よりも、異文化間コミュニケーションスキルに大きな変化が見られることも報告されているが（Williams, 2005; Thompson, 2009）、実際の交流を経て「医療専門職として会話できるための英語力の向上」の課題を感じることも、異文化コミュニケーション能力の向上への一要因となると考えられた。

3. 今後の経験を深める上での課題

交流プログラムの満足度はとても高かったが、難易度について少し難しかったと感じた学生が7割いた理由として、サブカテゴリーでも「医療専門職として会話できるための英語力の向上」が挙げられていたことから、英語力の課題が挙げられた。英語力の課題を感じることも自体が経験として大切なことではあるが、プレゼンテーションではスピーキング能力に加え、リスニング能力、ディスカッションは対話する能力を必要とするため、基礎の英語力が関係する上、保健医療に関するプレゼンテーションや医療職の講義は専門用語の英語力も必要である（篠原ら, 2023）。専門医療職だからこそその学びが深まるよう英語力をなるべく高めて交流に臨むことにより得られる経験が深まる可能性が示唆された。

倫理審査機関名と承認番号

本研究は実践報告であるため、倫理審査は受けていない。

付記（学位論文や学会発表の一部など）

本内容は、15th INC & 28th EAFONS 2025（2025年2月13日、14日：韓国、ソウル）にて発表を行った。

"Student Experiences in Cross-cultural Nursing Exchange -Japanese Nursing Students' Field work in the Philippines-"

謝辞

本プログラム実施にあたりご協力いただいたウエストヴィサヤス大学 Madonna Palmes 先生に心よりお礼申し上げます。

利益相反の有無

なし。

著者資格

ES は本報告の計画およびデータ収集、分析、原稿の作成；TW はデータ分析、原稿の作成、ST、SN はデータ分析、原稿の確認を行った。すべての著者は最終原稿を読み、承認した。

文 献

- Ball, R.E. (2004). Divergent development racialised rights: Globalized labour markets and the trade of nurses—The case of the Philippines. *Women's Studies International Forum*, 27 (2), 119-133.
- Cowan, T., & Norman, I. (2006). Cultural competence in nursing: new meanings. *Journal of Transcultural Nursing*, 17 (1), 82e88.
- 外務省 (2024). フィリピン共和国. <https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/philippines/> (2024. 10. 24 閲覧).
- 外務省 (2022). 世界の医療事情フィリピン. <https://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/medi/asia/cebu.html> (2024. 10. 24 閲覧).
- 川口貞親 (2009). 日本、フィリピン、インドネシアの看護教育カリキュラムの比較. *九州大学アジア総合政策センター紀要* 3, 91-104.
- 経済産業省 (2022). 医療国際展開カントリーレポート, 新興国等のヘルスケア市場環境に関する基本情報フィリピン編. https://healthcare-international.meti.go.jp/files/document/countryreport_Philippines_2021.pdf (2024. 10. 24 閲覧).
- 文部科学省 (2017). 大学における看護系人材の在り方に関する検討委員会最終報告書. https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/40/toushin/_icsFiles/fieldfile/2011/03/11/1302921_1_1.pdf (2024. 10. 24 閲覧).

- 内閣府 (2018). 我が国と諸外国の若者の意識に関する調査. <https://ssjda.iss.u-tokyo.ac.jp/chosa-hyo/1302s.pdf> (2024. 10. 24 閲覧).
- Sagar, P.L. (2014). Integrating transcultural concepts in staff development: recruitment and retention of foreign-educated nurses. In Sagar, P.L. (Eds.), *Transcultural Nursing Education Strategies* (pp. 323-340). New York, Springer.
- 篠原枝里子, 竹内翔子, 中村幸代 (2023). オンライン海外フィールドワークの取り組みと学生評価. *横浜看護学雑誌*, 16 (1), 14-21.
- 田中真奈美 (2013). 日米大学生の学びにおけるモチベーションの相違. *日本学習社会学会年報*, 9, 3-6.
- 田中博子, 志賀由美, 西垣克 (2009). 日本とフィリピンにおける病院看護業務の比較—タイムスタディー法を用いた主要業務の検討—. *日本看護管理学会誌*, 12 (2) 94-105.